
一年前の逃避的世界

海苔男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一年前の逃避的世界

【Nコード】

N7698K

【作者名】

海苔男

【あらすじ】

受験やだなあ憂鬱だだなあ少年と愛犬が異世界トリップ。

冒険したり、恋愛したりしなかったり。ゆるーく日常生活を送る。

……はずだったんだけどね。

その1

中学もあと一年だ、と大河はため息をついた。

大河はもうすぐ中学三年生になる。所謂、華の受験生。カッコ笑い、と友人たちと、テキストにしていれば普通に受かるなんて軽口を叩いてはしゃいでいたが、そんなに甘っちょろいことじゃないことぐらいは、みんなわかっていた。

受験勉強を去年の秋から始めて、ずっと勉強はテキストに、ゲームとか野球とか真っ当に子供らしく遊んでいたのに、その時間が容赦なく削られてゆくのに、愕然とした春休みである。理不尽だ、つくづく思った。

これからはもっと酷いんだろうな、とため息をもう一度つく。何故試験をしてまで、高校にいかなくてはならないのか。否、何故この社会が学歴社会なのだろう。大学まで行っても就職難なこの時代、中卒なんかではろくな職業に就けるわけもないことは分かっているが、大河はそんなの空しい気がした。だが、まともな仕事に就くためには、遊んでいる暇はないと、充分承知している。

「のんきにおまえの散歩してられんのもこれが最後かなあ」

公園のベンチに勢いよく乗る愛犬にひっぱられて、大河はベンチに座らざるを得なくなった。機嫌よくベンチに横になる愛犬のシオンの頭をなでる。一年前、家の前に捨てられていたので、種類は知らない。調べたらシベリアンハスキーに似ていたシオンは、竹の子みたいにすくすく大きくなって、イノシシとタメはれるくらいに大きくなった。貧弱ではないが遅しくもない大河は、飛び掛られたらすぐ尻餅をついてしまう。帰宅したときなんかは、全身で喜びを表現してくれるので悪い気はしない。いや、可愛くて仕方ない。親

ばか上等だ。

ね、と意味もなく相槌を求めてみて、不思議そうにこちらを見るシオンの喉元をなでてやる。幸せそうに目を細めるそいつを見ているとおれまで幸せになれそうだと大河は目を細めた。

と、シオンはぴん、と耳を立てる。ぷるぷる体をふって、シオンはびよん、とベンチから飛び降りた。

なにかを思い出したみたいに、シオンは駆け出す。ダッシュっすかシオンさん。大河はベンチから引っ張り出され、ついでにつんのめることとなった。

「うわっ、ちょ、まてって」

シオン！と叫んでもあいつはとまらない。大河は前に転んでずるずる引きずられることになって。なにアイツの馬力。ていうかなんだこの図は！

大河は耐え切れなくなってにロープを手放した。脱兎のごとくシオンはかけだして、筒状のすべりだいにすいこまれていった。大河は立ち上がって砂をはらってそっちに向けよる。

ダカダカダカ、とプラスチックでできているすべり台がゆれた。上るのに苦勞してるみたいだ。プラスチックの壁ををあいつの肉球でふんばるのはきついだろう。からだも重いし。足をばたつかせている様子が目に浮かんで、思わず頬が緩む。

ふ、と音がやんだ。あきらめたかな、すべり落ちてくるかな、とほくそえんだ。中は覗き込まない、シオンの巨体が顔面に直撃なんてごめんだ。と大河はのん気に構えていたのだが、いつまでたっても音沙汰はなく。

大河は首をかしげた。そういえば、なんでこいつは突然これに飛び込んだんだろうか、大好物のチーズでも中に置いてあったんだろうか。でも、すべり台の中にチーズが放置されているものだろう

か。いや、ねえよ、とかぶりをふる。

「シオン？」

大河はシオンが滑り落ちてくるのを覚悟し、恐る恐る、中を覗き込んでみた。すべり台のなかにはなんにもなかった。嘘だろ、とつぶやいて目をこらす。目に付くのは向こう側の青空と、すべり台の壁の落書きだ。相合傘に、公衆の面前で口をだすのをはばかられる単語などなど。

おかしいな、と大河はすべり台から頭をだして周りを見渡してみよう。人っ子一人いない、公園。遊具の上や、道路にも目をこらしてみたら、どこにもシオンの姿はなかった。

何より、なんの物音もしない。

「うそだろ……」

大河は真っ青になった。もう一度周りを見渡す。いない。悪あがきにもう一度すべり台の中に頭をつっこんで、滑り台を這い上がる。小学生のころは、これをどれだけ早く上れるか、というのを友人競ったものだ。少し感覚は鈍っていたけれど、なれたものである。

手元に目をやる。『たかしくんとりよう思いになれます様に』『四小の佐とう大つきらい！』懐かしいな、とちらりと思った。

（おれ、ここに何かいたっけな）

マジックペンを片手にはしゃいでいたことは鮮明に思い出せるのに、書いた内容が思い出せない。そうだ、書いた内容をみんなにひた隠しにしていた。なんでだっけ

「いやいやいや」

正面を向いて足を踏ん張りなおす。シオン、と呟いてみた。どこだ、どこだ。

「あれ、」

大河は、壁の落書きのひとつに顔を近づけた。周りの落書きと同じように、黒の油性ペンでかかれた 変なもの。大きな円のなかにぐちゃぐちゃとところ狭しに記号のようなものが書かれている。

(なんだろう)

小学校で流行っているんだろうか、ゲームの影響で魔方陣だなんだ作って騒ぐもんな、と改めてそれを見る。角の生えた日本足の獣複雑な幾何学模様 それにしては、本格的じゃないか？

改めて、大河はそれをまじまじと見る。なんだろう、なんだか、引き寄せられるみたいに。それよりもシオンを探せよ、という声も頭のなかから聞こえてくるのだが、それよりも、あの妙な落書きのことが頭から離れない。

頭を振るが、どうにかなるものでもなく、大河は首をかしげる。

(変だな)

なんだかこの場から去るのに変なやましさを覚えた。妙な落書きが目に残る。思わず指でなぞってみたら、目の前が真っ白になった。

その1（後書き）

後の予定はさっぱり決まっていりませんが、気合で乗り切ろうと思
います。

よろしくくださったら、うれしいな。

その2（前書き）

注意

暴力的表現アリ

その2

その、真っ白な光が、なぜか懐かしく感じた。

「ん……」

酷く眠かった。目を開けたくない、と大河ははみじろぐ。眠くて眠くてたまらない。まぶたが固まったように動かない。

今、なにが起こったかだとか、鼻をつく土ぼこりの匂いだとか、全部どうでもいい。眠い。眠い。

ざわざわと空気が肌をかする。変な違和感に大河は眉をひそめる。うるさいな、おれはねむたいのに。だまれ、だまれよ、

ガッ！

腹部に尋常じゃない衝撃が走り、大河は、目をあけた。目の前には靴の群れがあり、どういう状況か理解する。なんで弱冠14歳で修羅場を体験しなきゃなんねえんだよ、と心の中で毒づいた。リンチなんて冗談じゃない。

眠いどころの話ではないのは当然で。大河は飛び起きようとして、また、腹部に蹴りを入れられる。

「つう、ぐ」

吐き気が襲ってくる。口元をおさえてうずくまってそれに必死で耐えた。

口の中に饅えた匂いが広まってくる。気持ち悪い。肩が震えるのを感じた。ゲロの不快感と気だるさと冒頭からひきずっている眠気が酷くて、体に鉄塊をつながれている気分だった。靴の群れは眼前まで迫ってきているのに、ろくに反撃もできやしない。

(ちくしょう)

必死でつばを飲み込んで、呼吸を整えてから、顔をあげた。途中で何度か催しそうになったが、なんとか耐えた。下卑た笑いが視界をかすめる。死ね、と口の中で毒づく。

「おー復活か？元氣だねエ」

片目を眇めて口元をゆがめているがたいのいい男を見上げた。なるほど、中々強面な野郎だ、と合点する。ファンタジー小説かなんかで主人公にあっけなくやられる立ち居地の奴だ、と大河は心中でせせら笑う。

(現実でもできたら爽快だろうな)

おれはさしずめ、主人公から助けられる小物野郎といったところか、と大河はズボンの砂を払った。が、悪党が主人公にこてんぱんにされる理由というのは、小物野郎を数多く食い物にしてきたからであり、ゲームじゃあるまいに、そんな主人公野郎はいるわけない。あーあ終わったな、と思った。

「……やんnaつてきた」

立ち上がったはいいが、今すぐ地面にのの字を大量生産したい気分である。

大河は、靴で地面の砂をじりじりやりながら、強面野郎を見上げた。

「じぞう、やる気か？」

「……お兄さんズボンにうんこついてますよ」

強面は一気に間抜け面になった。

そんなはずはないのに、確認するのが人間というもので。友人も同じ嘘にひっかかったな、と懐かしい気持ちになる。まさか、こんな手馴れたチンピラがひっかかるなんて思わなかった。嬉しい誤算だ。

結果オーライ、と隙を突いて強面の横をすり抜ける、そのままダツシュ。

「ツてめえ！あとでぶっ殺す！」

「ズボンの後ろですよ！よく見て！」

大河はにっこり爽やかに笑ってやった。少々顔が青白いかもしれないが、ご愛嬌である。聞きつけたご婦人の方々が怪訝そうに眉をひそめてこちらをみってくるが、スルーだ。そのまま、がむしゃらに人ごみをすり抜けて走った。彼はがたいがいいので、なかなか動けないだろう。大騒ぎの大通りから路地に入り込んで一息ついて、そのまま座りこんだ。まだ胃のあたりから違和感が消えない。ため息をついた。

通りをみゃれば、みんな気づくどころか此方の方を見やしない。狭い路地に用がある人はあまりいないだろうし、人がいるとも思わないだろう。

それにしても、と大河は思った。みんな昭和っぽい服装だ。おれみたいなパーカーはまだ一回も見かけていないし、

(え?)

服?

めまいがした。

往来の人々が着ているもの。皮の靴に簡素な布のお洋服に。

ご婦人方の眉の潜めように合点がいく。

（おれは、イレギュラーなんだ）

ここはどこだ、という以前に、ここはいつだ、になってしまった。全部木でつくられているカントリーな露店が軒に並ぶ大通りを見る。やる。

シオンもいない。

わけわかんないところに、おれ一人。

考えてくると気がめいつてきて、大河は思わず大きなため息をつく。埃が舞い上がって、次は咳き込んだ。

散々だ！！

その3

「アイスたべてえな」

壁にはりついて、気分はまるでゴキブリである。ゴキブリやネコはこんな狭くてほこりっぱい道をいつも利用してるのか、尊敬の限りです本当に、と息をつく。独り言でもいっていないとやりきれなかった。

「……アイスが食べたい」

大通りに戻ってまた目立つのは気が進まなかったもので、とりあえず大河は路地の奥に進むことにした。路地の出口ではなく、挫折への道を一步一步踏みしめているような気がしてやまないのだが。あつちの明るい通りの光はここまで届いてまぶしくて、大河は胸が切なくなってくる。遠い、気が遠くなるほど遠い。かに歩きがこんなにつらいなんて知らなかった。うう、とうめく。口の中が乾いて仕方なかった。

アイスクリーム。アイスクリームが食べたい。

「バニラじゃないと認めない……」

うわ言めいた言葉が口をついてでる。なんであの時大通りにいかなかったんだらうか、と後悔した。気が進まない？割となんとかあったかもしれないじゃないか、少なくともこんな状況よりは！大河はうめいた。運がよければ今頃は食べ物にありつけていたかもしれない。考えても仕方がないのに、一度考えはじめるともうそれが頭から離れない。ますます、頭がぐらぐらしてくる。

気分を紛らわそうと空を見上げると、狭い空に鳥が悠々と旋回し

ている姿が目に入る。

(おれの頭も飛んじやいそうだ)

「ぶは」

狭い路地をぬけて一息ついて、額の汗をぬぐった。もう一足で閉所恐怖症になったかもな、と少しぞっとする。

そこには坂道が通っていた。人通りが少なく、住宅らしきものが陳列している。大河は、自分の家とは違って手入れが行き届いているな、と他人事みたいに思っていた。夕日に照らされた玄関先の花々が目に優しい。

ぶおー、と簡易ラッパのようなものを吹いて通り過ぎる自転車。

荷台の上の大きな木箱が、ごとん、と揺れた。豆腐売りみたいなものだろうか。やがて、それも坂の上へ小さく消えてゆく。

落ち葉が、足先を掠めた。先ほど路地でかいた汗が冷え始め、大河はくしゅんとくしゃみをする。どうやら秋らしい、と誰かが頭の片隅で言った。

大河は坂道の上へ一歩足を踏み出す。とりあえず寢床を探さなければ。こんな格好で野宿なんてしたら風邪を引いてそれをこじらして、バッドエンドだ、と身震いをする。こんなわけわかんないところで分けわかんないまま、死んでたまるか。なるべく早足で坂道を登る。どうしよう。宿にでも止まるか。いや、そんなものは見当たらないし、そもそもお金がない。じゃあ、ここいらの家に押しかけるか。いや、まず家にも入れてくれない。変質者扱いだ。下手したら警察だ。ダメだ、と大河は一人かぶりを振る。と、前から犬を連れて歩いてくる身なりの整った男性が目に入り、思わず出そうになったため息を飲み込んだ。いいな、散歩なんて、気楽なもんだよな、と彼らを一瞥する。

茶髪のオールバック、たつぷりとたくわえている口ひげ。口の端が上がってますよオッサン、と大河は口内で毒づいた。ご機嫌らしい。目は大きくて、キラキラしている。オッサンなのに、とまた辟易とした。

連れている犬は白かった。ピンと立っている耳、全体的にたくましい。大きさはそうだな、と大河は目を細めた。イノシシとためはれるくらい

「シオン！」

その犬は勢い良く大河の方を向いて、嬉しそうに吼えた。男性はぎよつと目を見張る。シオンはというと、そのまま大河に突進してきて、大河は内心、げ、と呻いた。

（こんな石畳の道で尻餅なんてついたら痛いに決まってる！）
男性の方も戸惑っているらしく、え、とかうわ、とか言いながらシオンに勢いに負けてよろめいている。

「わおん！」

「っ！」

「ぐー！」

シオンが喜びのあまり大河を押し倒し、大河が盛大に尾てい骨をうち、男性が石畳と歯が折れんばかりのキスをしたのは、ほぼ同時だった。

その4

「くすぐったいって！」

シオンは嬉しそうに、本当に嬉しそうに大河の顔をなめまわしている。大河はとうとうと尾てい骨の痛みで正直のたうちまわりたいが、シオンにのしかかられて呻くぐらいしかできない。

(嬉しいけどさ……！)

痛いもんは痛いのは隣の男性も同じらしく、口元を押さえながら顔を歪めている。小さく呻いて大河とシオンを見、苦しそうに口を動かした。

「君の犬かい？」

「……そうです」

くぐもっている。口を覆う指の間から除く赤色がやけに鮮やかだった。

「あの、血が」

「平気だよ」

そう言って立ち上がり、彼はズボンについた砂をぞんざいに叩き落とす。

「その犬、昨日こちらでうろつろしてたんだ」

それで、拾って飼うつもりだったんだ、と彼はハンカチで口元の血をぬぐった。「娘が犬を欲しがっていたから、ちょうどいいかと思って。でも、君が現れてしまったからなあ。残念だ」

肩を竦めて、彼は笑う。目じりに出来た皺が優しげだった。

「さあ、送っていこう。暗くなってきたしね」
「え」

大河はうるたえる。まずい、家なんてない。だいたいここどこだ。目を泳がしているうちに彼は、言い放った。

「ここで犬を渡して、はいサヨウナラはちょっと感じが悪いじゃないか」

「はあ」

断るタイミングを完全に逃してしまい、大河の背中に冷や汗が流れた。どうやってごまかせばいいんだパトラツシュ。

いっそ逃げ出そうかと画策し始める大河に、そうだ、と彼は楽しそうに笑みを深める。

「私はオーウエルと言った。君は？」

「……大河です」

「良い名前だね」

「はあ」

『オーウエル』 どうやらここは西洋らしい、と打診する。それで？どうすればいい？

「で、君の家はどこにあるんだい？」

「……ええと」

(どうしようもできねえ！)

笑顔で尋ねられて、大河は口ごもった。たった数十分まえにここに来たのだから、答えられるはずがない。どうやってきたのかも分からないし。いっそ本当のことを話そうか、という考えもよぎったのだけれど、信じてもらえるか確証が持てなかった。

逡巡していると、オーウェルは眉をひそめる。

「……家出とか」

「……おれ、家に帰りたくて困っているんですよ」

大河は苦笑した。不思議そうな顔をする彼。大河はなんだか申し訳なくなった。本当のことを話そうか。いや、今より気まずくなるに違いない。目覚めたらこの街にいました、こんなところ露ほども知りません？ そんなバカな話があるか、と内心で吐き捨てる。おれは、割と現実主義者だったはずなんだけど、どうしてこうなったのだろうか。

「まさかとは思うのだが、家はあるのかい？」

「あつたらいいですよね」

なぜやりな返事を聞いてオーウェルはますます不可解そうな顔になった。

「迷子かい？住所を言えば、ほら近くに交番があるし」

「交番」

（交番なんてあるのか）

あとでたずねてみます、と返事をする。彼は怪訝そうな顔を緩めないままだ。

そんな彼に居たたまれなさを感じながら、ずっと気になっていたことを念のために質問する。

「そうだ、日本って知っていますか」

「二ホン？なんだそれ」

予想外ではなかったものの、少なからず衝撃を受ける。大河は思わずため息をついた。だめだ、どうやったって家には帰れそうにない。こんな状況に置かれているのに期待していたらしく、大河のシヨックは大きかった。言い方を変えたら、と藁にもすがる思いで『ジャパン』とまくし立てようとしたが、止めておく。こんなわけがわかんないところで日本語が通じているのに、英語も糞もあるか。ちくしょう。

「大事なものか？一緒に探そうか」

そうじゃない。そうじゃないんですよ、と大河は黙ってかぶりを振った。

これ以上道端で話をするのも申し訳ない。今日は野宿でもいいや、とため息をつく。

「もういいです。ありがとうございます」

「いやでも、君は帰る家がないと」

「大丈夫です」

彼の言葉を遮って、それじゃあ！と素早い動きで身を翻す大河に、オーウエルは慌てて声をかけた。

「君、私の家で泊まらないかい！」

「え？」

驚いて振り返る大河に、彼は苦笑する。

「どうせ今日は野宿でいいや、とか考えてたんだろっ」

凶星である。大河は気恥ずかしさを感じながらも嘯いた。

「いや、交番に事情を言っただけでもらおうと……」

「交番の場所もわからないのに何を言ってるんだ」

「わかるかもしれないじゃないですか」

「ともかくだな」

少しの間私の家に来てくれ、と彼は言った。大河も軽口を叩きながらも意義はない。そこまでお世話になるのも、と躊躇している自分もいるのだが。

渡りに船だ。うなずいた。

その5

坂道。連立する建物の隙間から、あかるい夕日がのぞく。石でできている道に木漏れ日じみたのがちらちらと。少年の顔にも同じく。時折まぶしそうに目を細める大河君を気づかれないように見て、私は心の内でこっそりため息をついた。

先ほど、この少年が言っていた家がないやらなんやら、むにやむにやと分けが分からないことを、私はいまいち信じる事ができなかった。

家がない、ということとは余程貧しいのが当たり前である。貧しいのなら、服だつて数がそろわない。

なのに、彼が着ている服は擦り切れているどころか、薄汚れひとつなかった。着古した衣類には、汗が多く付着する襟口や袖がどうしても汚れてくる。洗っていたつうつすら残る。なのに彼の服はどうだ。ぱりぱりしている。少し埃っぽいが、それだつて長時間市場をうるついていたとか、そういう最近のものだろう。あまつさえ、なんだかよくわからない爽やかな香りさえしてくる。なんの石鹸だろうか、高級品であることは間違いない。

そうだ、小理屈をひねくり回すより、確実な理由。『家のないものがどうやってこんな綺麗な犬を飼えるのだ』 指摘すれば、また困った顔をするのである。その戸惑いは、この状況が全く理解できないことから来るものではなく、彼が私をどうはぐらかそうと頭を回転させている、という、全く子供らしくない理由から来ているのは目に見えていた。いわば、防衛線。信用の無い人間に、情報を与えるのは危険だ、とかなんとか考えているのだろう。もしくは、話しても無駄、とか。私はそこまで不甲斐ない大人ではないと思うのだが。

二ホンとは何だ。甘いのか？言及してやればよかつたのかも知れない。そんなには頼りがいないように見えるのだろうか、とまたため息をついた。まあ、出会ってまだ数分も立っていないのだ。仕方が無い、とうなずいた。

「ため息をつくると幸せが逃げるんですよ」

「え？」

呆けていたらしい。われに返って大河君の方に向き直った。

「ですからね、ため息をつくると、幸せが逃げて行くんです」

「へえ。初耳だ」

「でしようね」

前に向き直り、彼は「ぶつぶつなんか呟いていましたよ。疲れてるんですか」と無感情に言った。

そういえば、会ったときから、彼はどこか飄々としていた気がする。そこまで考えて、脳裏をかすめたあの子の面影を急いで追い払った。

そういうのは、大河君にも、あの子に対しても失礼だ。しっかりしろ。

「疲れてるかもしれないな。忙しいんだ、最近」

「ああ……忙しい折に、すみません」

「いや、いいんだ。行き場がないんだろ」

急いで笑顔を貼り付けた。彼はこちらを一瞥すると、いいんですよ別に泊めてくださらなくても、と言う。せめて今日くらいは、と軽く言うと、申し訳なさそうに、頭を下げられた。私はそんなに偉くないんだけどなあ。

「困っている人を放っておくのは苦手なんだ」

「お人よしですね」

「そう。だから、そのお人よしを助けると思ってる」

にっこり大河君に笑いかけると、「助けてもらったのはおれなんですけどね」、と彼は苦笑した。

やっぱり子供は笑顔でいて欲しいな、と思った。そして、大河君の頭を撫でようとすると、彼は素早くそれを避ける。

「あ」

やつちやった。咳きが聞こえてきそうだった。申し訳なさそうにこちらを見て、小さな声で彼は、

「すみません。慣れていないので」

と言った。

「いいや、無理強いはしないよ。ごめんね」

撫でるのに無理強い？自分で言ったことに少し違和感を感じながら、彼の背中を優しく叩く。彼は身をすこし強張らせた。強張らせた？

大きくなつた違和感を抱えながら大河君を見つめる。彼は前をむいて、何も気取られないように犬 シオンを連れて歩いていく。

すこし、厄介ごとを抱えた少年を拾ったものだ、と思う。嫌ではない。早く心を開いて欲しい、とも思う。そうしたら、彼の抱えているものが、少しは軽くなるだろうか。そうなるといい。

改めて少年を見つめた。犬を連れて前を歩く少年の華奢な背中がまたあの子に被って慌てて頭を振る。

彼が私を信用するしない以前に、これが問題だな。私は苦笑

した。

その6

大河は、服を伝わるぬくもりに嫌悪感を感じた自分に嫌気が差し、こつそりと顔をしかめた。シオンは前だけを向いて歩いている。この人は少なくとも、きつと、自分に危害を加えない。その人の行為に嫌悪感を感じるのは、失礼だ。頭ではわかっている、体は鳥肌がたっている。もう、14なのに。唇をそつとかみ締めながら、歩みをはやめた。不甲斐なかった。

「君、行き過ぎだ。ここが私の家だ」

「あ」

シオンの手綱を引っ張る。大河はぼうつとしてたみたいですね、と適当に返事をした。そうだね、とオーウェルは笑って見せる。大河は、この人がお人よしどころか純真潔白なのではないか、という気さえしてきた。

(オッサンの癖に、目はキラキラだし、笑顔もキラキラだし)

オッサン相手にこんなこと思うのと、キラキラ、という形容詞を使っているのとで、二重に恥ずかしさを感じた大河はシオンを見た。彼は大河を見上げていた。心なしか、微笑んでいるようにも見えた。

「その、シオンくん、なんだか犬という気がしない」

「そうですか」

「そうだよ。君を心配そうに見上げているのがもつ」

シオンくんは、タイガくんのおにいさんだね。とオーウェルは優しく言い、シオンは我が意を得たり、と吼える。ちよつと待って、

と口を開けかけた大河を気にも留めず、オーウェルは門の取っ手を引いた。

「どうぞ」

「……ありがとうございます」

喉まで出掛かったツツコミを飲み込み、お礼を言つてオーウェルの家へ足を踏み込む。

(釈然としない……)

シオンを見下ろすと、心なしか悪戯っぽそうにきらめく目が、大河をまた見上げていた。

「まあ、まあ、あらまあ」

オーウェルの奥さんはふくよかで、穏やかそうな人だった。空気に任せている長いふんわりした髪が、本人の性質をよく表している気がする。

彼女はお帰りなさい、と言う途中に、大河とシオンに気づき、大河の服の異様さと小奇麗さに戸惑ったのか、さっきから、主にこれしか口にしていない。

「まあ、どうしたの、あらまあ、あなた、どうなすつたんですかこの子達は。あら、わんちゃん」

わんちゃん、とシオンの頭を撫で、散歩は楽しかったかい？と話しかけるオーウェル夫人の顔を、シオンは嬉しそうに舐める。

「わん」

「うふふ、くすぐったいわ」

「ところでマーシー、もう名前は決めたのかい？」

「うっん、まだ。あのルーイがね、すごく悩んじゃってるのよ！」

幸せそうに言葉を弾ませる自分の妻に、オーウェルは申し訳なさそうに顔をゆがめた。

「それが、飼い主が見つかってしまっただな」

「あらまあ！」

ぱつ、と口元に手を当てて驚き、夫人はあらあらどうしましよう、と眉尻を下げる。

「あの子、とつても浮き立っていたのに」

「そうか……」

苦々しい顔をする夫婦に、大河は家に踏み込んで数分もしないうちに、居たたまれなくなってしまう。

「す、すみません、おれ」

「君は悪くないよ。勝手にはしゃいで、ルーイに期待させてしまった私たちが悪いんだ」

「そうよ、君は悪くないわ」

顔をしかめながらフォローを入れられ、大河はますます申し訳なくなる。

「でもおれ……」

「ルーイ！」

大河は反射的に声の先を見る。夫人に似た、ふんわり長い髪をそのままにした、小さな少女が階段から降りてきていた。

「おかえりなさい、パパ」

何故だか、凧いだ水面が脳裏に浮かんだ。静かな声だ。耳に心地良い声だ、と思った。その少女がこちらを見る。目に、焼きつく。咄嗟に目をそらした

（ていうか……おれ、すごく恥ずかしいこと思ったんじゃないか）

ごまかしも込めて、大河はシオンを撫でてみた。彼はバカにするような目で大河をみていた。大河は、とても、とても悔しくなった。夫妻はというとわっと自分の娘を抱きしめていた。

「ルイー、ごめんな、楽しみにしてたわんちゃんの名前」

「パパ、わたし楽しみになんかしてない」

「ルイー、名前付けられなくなっちゃったの。飼い主さんが見つかって」

「うん、よかった」

先ほど夫妻から聞いた、浮き足立っている、という言葉の意味を大河は脳内でもう一度確認し、そのルイーという少女の冷めっぷりをもう一度認識して　また、浮き足立っている、という言葉の意味を再確認した。

「ルイー！泣きそうじゃない！ごめん、ごめんね。私が名前さっさと付けちゃえばよかったんだわ」

「泣いてない」

「ルイー、ごめん。でも、元の名前もとても素敵なんだ。どっちにしる一緒に住むんだし、我慢しよう？」

「わたしは平気　え」

父のオーウェルの方を見て目を見開くルイー。そして、ゆっくりと大河の方に視線をスライドさせて、口を開く。

「この子の名前、なに？」

「シオン。おれが、つけた」

「……そう」

目を伏せぎみにして、おいでシオンと、消え入りそうな声で言う声に、また大河は硬直した。

シオンは大河なんてお構いなしにルイーに走り寄る。こけた大河に、夫人はくすりと笑った。

「あらあら、大丈夫かしら？」
「別に平気です」

肩に手を添えられそうになったのを慌てて避けて、大河は立ち上がる。すみません、と頭を下げる。夫人は、あらまあ、と困惑気味に肩頬に手を当てた。そして、少し逡巡すると、口を開けた。

「そういえば、あなたの名前を聞いていなかったわ。なんていうの、坊や？」

「大河といます」

「そうだ、マーシー。この子を、」
「いいです、オーウエルさん」

オーウエルを制して、大河は口を引き結んだ。おれ自身が厄介になるのだから、おれが言わきゃ意味がないのだ。

それに、ルイーとシオンがじゃれているのを横目でみた。ルイーは無表情でシオンと遊んでいた。あの扱い方が、嬉しくないわけが無い。シオンは自分の犬だけど、あの子とシオンを引き離すのはいやだ。

ルイーとシオンを尻目に、大河は口を開けた。

「大河といます。オーウエルさんが、少しの間、ここに住まわせてくれる、と言ってくれました。なんの許可もなしにすみません、でも、おれも行くあてがありません。一晩だけでも、とまらせてください」

あらあら、と口に手を添えて、上品に、まるで嫌じゃなさそうに言う夫人に、大河は少し泣きそうになった。

その7

ああ、これは夢なんだな、と思いながら、大河は必死に男性の頭にしがみついた。どうやらおれは肩車をされているらしい。ぐらぐらして不安定で、なんだか気分が高揚している。大河は自分でも気づかずうつとりと周りを見はらした。こんなに視界が高い。楽しい。女の人の顔も下にある、不思議だ。大河は、きゃいきゃい声をあげた。随分高い声だったが、大河は気にも留めず男性にもつととねだる。男性は嬉しそうに笑い声をあげた。傍らにいる女性も。大河は楽しくて仕方がない。

昨日おれがしたことと言えばフラグを立てたことだけかな、と大河はうすぼんやりとした思考の中で判断する。

枕はふかふかだった。掛け布団も言わずもがなである。バカみたいに暖かなベッドの寝心地は最高だった。大河は手で顔を覆う。体が重い。全身をめぐる血が、よどんでいるような感じがした。

「夢……」

思い返すのをやめ、頭を振った。全く趣味の悪い夢を見たものだと大河は苦笑する。笑いあう家族ときた。肩車？ふざけてるのか。

「バカみたいだ」

だっておれに父親はいないじゃないか。

*

昨夜通された寝室は二階にあった。階段を降り、ダイニングに向かうと、既にオーウエルが椅子に座って飲み物を飲んでいた。コーヒーに似た色をしている。

「タイガくん、おはよう！」

「お、はようございます」

振り向いたオーウエルの勢いに押され、大河は少しもってしまつた。オーウエルは笑う。

「どうだい、調子は」

「おかげさまで」

おかげさまで悪いにもほどがある、と大河は内心ほやいた。夢見は最悪だ。寝心地は良かった。最高だった。あんなベッドで寝たのは初めてだったから、少し緊張したが。

あんなに良いベッド押しかけてきた奴が使つて良いのか、と大河はたずねると、オーウエルは笑顔を崩さないまま、だつて疲れていたらだろ、と当然のようにのたまつた。

「で、ベッド、最高だつたらう？ 特注品さ」

「ああ、ありがとございます……」

そんな、ウイंकなんてよこさないで欲しい。大河は息をついた。「どうしたんだい、ため息なんてついて」

「いえ」

「正直に言えば気が楽になることもあるよ」

「なんでもないですよ」

ふうん、とオーウエルは相槌を打つ。そして、持っていたカップをテーブルに静かに置いた。

「うん、もう一回さっきの台詞を言つても良いんだけど」

オーウエル膝をつき、とびきりにっこりした。大河は言葉に詰まる。え、どういう意味？

「な、なんですか」

「もう一声」

「何がですか」

「タイガ君遠慮してばかりだな、と私は思ったんだ」

「別に、そんなことないですよ」

「うん、もう一回さっきの台詞を言つても良いんだけど」

「な、」

わけわかんねえ、このオツサン！と大河は口内で叫ぶ。

「だからね、君は少しわがままを言えば良いと思う」

「は？ いや、」

「我慢してるんじゃないかなって」

大河は口元を歪めた。

「わがままなら言いましたよ、泊めてもらいました！」

「あれはやむを得ないだろう」

当然のように言うオーウエルに大河は頭を抱えなくなった。混乱も乗じてかいらいらしてくる。

「だから、なんなんですか！意味わかんないですよ、特注品の大事なベッド貸しちゃったりして、おれは、あつ呆れてるんですよ！あなたこそ少しは警戒心というものを知ってもいいと思います！」

言い終わって勢い良く息を吸い込む大河に、オーウエルは笑みを深めた。警戒心といってもねえ、とオーウエルは大河の頭を撫でる。警戒するも何も最初から危なっかしくて見てられないよ、とオーウエルは思った。口にだしたらますます機嫌を損ねられそうなので言わないが。

大河は依然として破願したままのオーウエルにさらにむっとして、自分の頭を撫でる手を払いのける。

「タイガ君」

「……はい」

「座らないかい？」

椅子に、と付け加えるオーウエルに大河は、それ以外の何に座るんですか、と思った。口には出さないが。

進められるままに椅子に座ると、奥のキッチンから夫人がでてきて大河の前に料理を置いた。キツシュのようなもの、白湯、サラダ。顔をあげると、夫人が笑った。

「お口にあうかわからないけれど」

「あ、ありがとうございます。美味しそうです」

「あら、ありがとう」

夫人は軽やかにキッチンに身を翻した。目の前の食事を呆然と見つめている大河に、オーウエルは、声をかける。

「朝食だよ。君の国に食べる習慣はあったかな？」

「あ、あります」

「そうか。うちの作るロシイは最高だよ、お食べ」

「ろ……？」

「ああ、そうか」

オーウエルは苦笑し、キツシユなようなものを指差して、これがロシイだよ、と説明した。白湯はニー、サラダはグツダウ。彼が飲んでるものはカウフというらしい。

「グツダウはね、野菜の盛り合わせっていつのかな……あっおい、ソースがないよ」

あらあら、と夫人が奥からできて瓶をテーブルに加える。ソースはソースなのか、と変に納得した。固有名詞以外は変換が聞くんだろう。

「でね、タイガ君。あ、食べながら聞いてくれ」

オーウエルは改めて、大河を覗き込んだ。大河は形だけ手を合わせてニーを口に含む。とろみがあった。お腹がほっこりしてくる。

「で、まあ簡潔に言くと君は家がないみたいだから、しばらくうちにおいて貰おうと思っていて……あーあーあ、そんなに急いで飲み込んだらむせてしまうよ。おちついて」

「お、落ち着いてられますかっ」

「ん？」オーウエルはそ知らぬ顔をする。「まあ、最後まで話を聞いてくれないか。で、だから一緒に住むのに変な遠慮はいらないって言うことを言いたかったんだよ」

「は、え、まだ」

「自分は納得していないって？ きっとこの後私たちの家をおいとまするつもりだったんだろう、君は。帰る場所が無い子供をやすやすほっぱり出すほど私たちは人でなしじゃないさ。で、どうせ君のことだから迷惑かけまいと、なんとかかなりますとでも言うんだろう。」

大人を舐めるなよ、君一人しばらく養うくらいどつてことないさ」

反論の余地が与えられず、大河はなんとはいえいいのかわからなかった。黙り込んでいる大河にオーウェルは笑いかける。

「唯一の問題はここの食事が君の口に合うかなんだけれど。美味しいかい？」

「……おいしいです」

大河は、こみ上げる何かを必死に押さえ込む。

「おいしいです」

そりゃもう、反則なくらい。

ルイーは、大河が朝ごはんを食べ終わったくらいにシオンと共に帰宅した。散歩に行っていたらしい。一緒にご飯を食べたかった、と思う反面、泣きそうになっているのを見られ無くてよかった、と安堵する。見られたからって、別に何かがあるわけじゃないが。大河はその考えを頭から締め出した。

「タイガくん、ぐっすりだったから。ルイーが行くって」「そうなんですか」

「ありがとう、とお礼を言ったら、そっぽを向かれる。」

「別に」

響く声にまた、大河はまたどきりとする。

(こ、恋する乙女すぎるわ……)

こっ恥ずかしさとむず痒さに一人戦慄する。典型的過ぎる自分の反応がまるで、そう、あの青春って奴みたいで、最悪だ。最悪だ。

「なんとといえば良いのか分からず、大河は曖昧に相槌を打って、才―ウエルに向き直った。」

「ごめんね、ルイー無愛想で」

「いえ、全然」

にやりと含みのある笑みを向けられ、それにも居心地が悪くなる。なにもそんなに、水を得た魚みたいな活き活きとした顔をしなくても良いじゃないか。むっとして大河は語調を強めた。

「で、おれはこれからどうすればいいんですか!」

「え?ああ、そうだな……学校に行かせようかって、昨日話してたんだけど、どうだい?」

「学校ですか?」

「ここには学校もあるのか、と大河は驚く。こんな古びたここで学校なんて言えるご身分。自分についているんだろうな、と、先ほど

のオーウェルの発言を思い出す。自信満々に子ども一人養うことくらいいけないと言った彼のことは、まあ、お金持ちなのだろうと思っていたが、この国有数のお金持ちなのかもしれない。

(……おれを養うのが、苦にならないって相当だ)

だから遠慮なく学費も払わせたりしてもいいとか、はない。大河は愛想笑いをする。ああ、大前提を述べていなかった。迷惑にしるそうじゃないにしろ、大河は学校なんて行きたくなかった。

「授業についていける気がしないので、あまり……」

あんまり行きたくないなあ、というのがうまく伝わるように、遠慮がちに大河が言っと、ううん、とオーウェルは唸った。

「遠慮してない？」

「まさか」

してなくはないが、正直！正直行きたくない！めんどくさい！

という主張を胸の内に押さえつけ、大河は、自分と周囲の常識の差をそれとなく述べた。

力説しないのは、社交性は人並みだけれど、まさか人間関係が面倒だなんていうだらしない一面をオーウェルに察してほしくないからである。

額面通り受け取ったオーウェルは問題はそこだよなあ、と顎をさすった。

「どうしようか……」

「あの、別におれ、学校行かなくても大丈夫ですけど」

大河は提案する。常識も(この世界の)教養もないやつが、いきなり完成されたパーティーのなかに放り込まれ、無事でいられる保証がどこにある。だいたい、と大河は内心眉を潜める。

(めんどくさい……)

大河の腰の重さは、ギネスだつて取れる。ごたごたに巻き込まれるくらいなら(というか、この展開なら自分がごたごたの中心になりうる)、引きこもっていた方が何倍もマシだ。幸運にも、この家の人たちは優しいし、マーシーさんのご飯はおいしい。彼女から学

べることがたくさん有りそうだし、そう、少なくとも、学校に行つて変にごたごたするより、ずっと良い。

「オーウエルさん、おれ……」

「そういうわけには行かないんだ」

大河の希望的観測と言いかけた反論は、その一言に打ち砕かれたわけだが。

「なんで、そういうわけにはいかないんですか……」

大河は、自分の声が落胆にまみれていることに気づいていない。

オーウエルは彼の方をこっそり一瞥すると、苦笑した。

「定期的な検査……国土総ざらいする検査が半年に一回あるんだ。

それに登録されていない人物は、すぐ弾き出されて　少なくとも

尋問は免れないよ」

尋問。物騒な話になってきて、大河はため息をつきたいのをこらえた。尋問は嫌だけど、

「別に、おれをいないことにすればいいじゃないですか……」

人間関係？くそくらえですよ。

「どうやって？」

悪あがきする大河に怪訝そうに訪ねるオーウエルに大河は不正を申し込む。

「え、っと、そういうのって各家庭が自主的に書類に用件？とかまとめて提出　するんじゃないですか、おれの国ではそうでした、けど……」

ね、と小さく付け加える。オーウエルに、もしかしたら、犯罪の提案をしたかもしれない罪悪感からと、そして、思い出したからだった。ここは一切の常識があまり通じない場所だった。少なくとも、二ホンでの常識は。

「……文字通り、国土総ざらいっていうのは、総ざらいだよ。魔法で登録されている人のデータと、国土にいる人のデータを照らし合わせるんだ。余りがあれば跳ねられる」

「うーわー」

魔法つて。

(ほんと、日本の常識なんか、ないも等しいわ！)

大河は、ますます学校が嫌になる。日本ではファンタジーだったあれやこれやが、ここでは当たり前前としてまかり通るのだろう。

「そうなる前に、なんとか誤魔化して登録しなきゃな……」

「オーウェルさん魔法つて、あれですか、呪文とか唱えちゃったりする……」

「まあ、複雑なのはね。簡単なのはちよいっと、すれば……君もできるだろう？」

できてたまるか。

「まあ普通にできませんね。ちよいっとつてなんですか」

「え、や、子どもの時しなかったかい？火とか出すやつは、生まれの時に抑制魔法かけられるけど、風とか水とかほら、こっ……」

指を跳ねさせて。ポン、と指の先からまるい水が飛び出してきた。

大河は啞然とする。

「嘘……」

魔法。魔法つて！現実味ねえ。魔法つて。え、うわ、

「……おれにも、できると思います？」

「そうだな……頭の中で、指の先から、水ができるのを想像してごらん。指をはねさすのは、イメージを固めるためだから、厳密にはやらなくていいんだけど……イメージって魔法ではすごく大事だから」

やってごらん、と言われるままに、大河は指先を見つめた。あそこから水ができる、オーウェルがやった通りそのままを頭のなかでイメージする。

指を、恐る恐る動かした。指先に、冷たい感触。

「できたね」

「はい……、やばい、うわ、」

大河は口元に手をあて、なにやら興奮した面持ちだ。はしゃいだ素振りは見せないが、目がキラキラしている。そんな、大河を見て、

オーウエルは苦笑した。

(普段から大人ぶって虚勢を張っている彼とは思えないな)

ふ、と笑みを漏らす。彼はそれに気づかず、まだ頬を高揚させている。普段は、子ども扱いして！と言わんばかりに頬を膨らますのに。それすら、あどけないわけだが。

「……学校で、きつと魔法を教えてもらえるよ」

「そうなんですか!」

ぱっと、顔を上げた彼の顔と目は、やっぱりキラキラしていた。年相応である。少々はすに構えすぎだとオーウエルは常日頃思っていたので、こういう面を見てほっとする。

(そういえば彼の年齢を聞いていないな)

何歳だろう。顔つきは幼いが、体格は割りと良いほうだ。15…

…14歳くらいか?オーウエルはぼうつと大河の顔を見ながら憶測する。鼻筋が綺麗だ。目が大きめ、瞳が良く動く。すこしつり目気味。薄めの唇は歓声をあげたくてたまらないように戦慄している。

(あの子が生きていたら、この子と同じくらいか)

似ている。髪の毛が黒いところ、感情を抑えたがること。意地っ張りなところ。

……

「あ」

オーウエルは大河に重なる少年の面影を振り払う。

「だめだ、」

口内でこつそり呟いた。忘れると決めたくないか。だめだ、何年たったと思っているんだ。

改めて大河を見つめた。なにやら真剣な表情だ。

「魔法……程度によるか……」

程度によるか、なんて。小賢しい。後で学校での授業内容をざっくり説明してあげなくては。ルーイも呼ぼう。彼は、のぼせ上がる

にちがいない。

（無邪気だなあ）

こんな無垢な子供に自分の罪悪感につき合わず道理などない。顔を歪めて考え込む大河に、オーウエルは声をかける。

「まあ、学校は行かなくてはならないしね、タイガくん」

大河は残念そうな、でも期待に満ちた目をして、頷いた。

「……分からないところがあつたら、なんでも聞いていいですか？」

「私もマーシーも大歓迎さ」

「迷惑かもしれませんが」

「いいや、むしろ嬉しいね！」

まるで息子ができたみたいで、とオーウエルは笑う。また、あの子の影が瞼の裏にちらついた。

それを振り払い、オーウエルは言い聞かせる。

（この子があの子に似ていようが似ていまいが、この子には笑っていてほしい、そうだろう？）

なあ、オーウエル。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7698k/>

一年前の逃避的世界

2011年5月21日17時43分発行